

百年史編集室の史料を利用して

羽田 貴史

『東京大学百年史』が完結に近づき、改めて百年史編集室とともに研究を進めてきたことの想いを噛みしめている。

私は、大学院（北大教育学研究科）進学時に大学を対象とした研究テーマを定めたものの、具体的な方向は何ひとつ見えず不安にばかりかられていた。内閣文書をもとに大学財政に関する修士論文を書き、博士課程に進んだものの、次はどう研究を進めるかは暗中模索であった。指導教官の山崎真秀（現・静岡大学人文学部）・小出達夫先生は、北大を対象にした個別研究を勧められたが、全体像が見えない段階で個別大学をとりあげる自信がなかった。とりあえず、帝国憲法体制成立期の大学に焦点をしぼり、資料収集のために何度か上京した。

その時、集中講義以来指導を仰いでいた寺崎昌男先生から、東京大学が百年史編纂にとりかかっていることを教えられ、安田講堂の狭い階段を登った。一九七八年の夏だったと思うが、当時は、酒井豊氏（現・青山学院大）と小川千代子氏とが、まだ一室しかない編集室におられた。大学内部資料は「ガード」が堅いと思っていたので、果して閲覧させていただけるとかどうかの期待と不安とが半ばして、こもこも来訪の意図を述べると、酒井氏は気さくに簿冊を取り出して見せてくれ、複写の便宜まではからってくれた。この時収集した資料で、初期議会期の予算削減が帝国大学にもたらした影響を確かめることがで

き、翌春には一本の論文にまとめることができた。

こうして、百年史の資料は私にとって一筋の光明とでも言うべきものになった。論文が学部紀要（『北海道大学教育学部紀要』第33号）に掲載されてまもなく、福島大学教育学部に日本教育史教官の公募があり、その一本の論文をたよりに応募した私は、幸運にも採用された（大学史研究がアカデミックなテーマとしては認知されてきたものの、まだ日は浅かった。指導教官は就職のことを配慮して研究テーマを広げることを示唆されていた程だから、私は福島大学の先見性に感謝して止まない。おそらく私は大学史のみをテーマとして教職に就いたもとも早いケースであると思う。もともとそれは自分の狭さを示すので、たいして自慢にはならないが）。

その年の冬、金沢で開かれた大学史研究会のセミナーで、寺崎先生から東大百年史の財政関係の執筆に加わることを勧められ、不安は大きかったものの、勉強する機会を与えられたと思ってお引き受けした。それまでになく、大学内部資料を系統的に扱う機会に恵まれた。

しかし、財政関係の資料は、それを対象とする人がいなかったこともあり、系統的な収集の方法や、どのような資料が存在するのか見当もつかなかった。八〇年の夏に、図書館の保存書庫に大量の予算関係資料の所在を確かめることができたものの、それを「読む」のは容易

ではなかった。悩んだ末、戦前に会計課に勤められていた方の名前を探し、調査協力の依頼をしたところ、快く応じてくれた方が何人かおられ、その一人が原武福治氏（元医科研事務長）であった。原武氏は、保存書庫の資料を整理作成された御本人であった。

原武氏を書庫に案内し、書類を前に質問を重ねる間に、積年の疑問がそれこそ氷解していくのがわかった。そして、残った疑問のひとつが、講座研究費はなぜ、いつごろ成立したのかという点であった。氏の整理された資料は、紛争のために大正末年から昭和にかけての部分で、かなり紛失していたのである。

編集室の会議でこの点を報告したところ、京都大学への調査が認められ、私は、京大の資料も見ることができた。京都では、たしかに予算概算資料はたくさん残っていたが、スチームパイプの通る倉庫の棚に、ひもでくくられて積み上げられている様子だった。その資料をめくる中で、従来言われていたよりも早い時期に講座経費案があるのを発見することができた。また、幸いにもこのテーマで科研費を交付されていたので、北大と九大を訪れ、予算資料を見ることができ、各大学の多様な概算要求の形式が、次第に整序されて講座研究費に統一されていく過程を描けるようになった。ようやく、個別大学の資料を位置づけることが可能になったし、大学史は個別大学の独自の慣行を総体として捉えなければならないのではないか、という視角も与えられた。こうした成果は、通史の中にもある程度盛り込むことができたと思う。

院生時代を含め十年たち、ともかく、大学財政研究について何かは

積み上げてきたし、今の時点になってようやく研究を開始できる視角——何を研究すればよいか——が、おぼろげながら見えてきたように思う。

大学史研究の個別テーマは、先行研究のない領域も多いだけに、それぞれ不安はあるように思う。私の場合、結局、より多くの資料を探し出し、読む中でしか解決してこなかった。もし、東京大学の諸史料の閲覧に最大限の便宜を与えられなかったら、途中で「転向」したに違いない。幸いにも、まだ、操を立てていられる。

大学の資史料は、私にとってまた別な意味を持っている。講座研究費の生みの親である横田春吉氏を尋ねて私は横浜へ行き、すでに逝去された氏には会えなかったものの、令息の博国氏から春吉氏の人となりを知ることができた。大学のことについては何ひとつ聞けなかったが、春吉氏のドラマに満ちた生涯——九州に貧しく生まれ、高等小学卒の学歴しかないにも拘らず篤志家に見込まれて上京し、夜学に通い、文部省予算掛長から京都大学・岡山大学事務官を経て実業界入りし、日曹コンツェルンを育てあげ、戦後の財閥解体で不遇の晩年を送る——を聞き、私の胸の中では、講座研究費の持つある種の合理性と、官僚制の枠内を突き抜けて生きた春吉氏とが分かちがたく結びついて定着した。大学の諸制度・諸慣行は、大学をよりよくしたいと願う人間の主体的意欲に多かれ少なかれ結びついて生まれており、こうした人々（ある時には有能な官僚でありまたある時には学者であったり）が織りなす制度の上に立って私たちが研究し教育し管理運営していることを実感することが、何よりも励ましであり、心を暖められる

のである。

最近、学内の委員会でカリキュラムや定員配置に関する仕事に関わることがふえたが、それでも、私は、過去がいかに現在を規定しており、新しいものは過去と「対決」しないかぎり作り出せないことを感ずる。そして、そのための条件、すなわち学内文書の収集・保存・利用のシステムがいかに脆いものかを痛感する。一見平凡な資料にすら作った人間の情熱がこめられているのを想う時、これらの意欲まで否定され嘲笑されているのではないかという痛みすら覚えることがある。

大学史を研究する人間であるとともに、大学の人間であるということの故に、大学史料の保存と利用には関心をもたざるを得ない。

(はた たかし 福島大学助教授)